

火星

平成二十四年七月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

大甕に午前の影や夏きざす

青葦のきつ先あはき薄暑かな

明易き土間に魚うお扱さじ濡れてゐし

夏祓水なめらかに岩を越し

水の辺のももいろ蚯蚓あさぐもり

蛭筵よんどころなく動きをり

丹波茶の渋舌の根に雲の峰

酔の匂ふ夕べ出でゐし墓

竹林の木洩れ日をくる黄帷子

めまとひの中くる貌を見られゐし

太白星

柳生千枝子

一片の春雪捉ふシャッター音
父の背を越す合格の子となりし
ぬきん出て早き一艘若布刈
風遊ぶ風車売り荷をおろし
猫柳彼の眼まぶしかりし頃
絵日記の明日へはみ出し暖かし
末黒野に来てひそひそと物を言ふ

杉浦典子

春寒し海図に赤き線引かれ
春風に向かひデツキを歩きけり

苺ジャム煮つめてをれば母訪ひ来
パドックの馬の仰け反る花ぐもり
みな帰りたる夕映えの蝌蚪の水
亀鳴くや飛鳥に遊び疲れたる
花冷の何も映らぬ神獸鏡

浜口高子

春障子のあはひに拝す吉祥天
石棺の洞を這ひける梅の風
養花天割つて青鷺降りて来し
しづくして海女通りけり花大根
鈴が鳴る谿のかたちの春がすみ
いづくより花散りかかる溝浚へ
モノレールの車庫のからつぽ夏つばめ

火星作品

山尾玉藻選

鮎子船きらを飛ばして戻りきし

宝塚蘭定かず子

自転車を押し花人となる日暮

逃水につつかへてゐる鼓笛隊

春菊が咲いてこの頃眠たかり餅

春蘭けにけり膝の上のあぶり餅

神戸深澤鱻

國原に虫湧きやまじ初つばめ

山桜お神酒あがらぬ神のなし

糸桜のうちより仰ぐ翁がほ

菜の花や渡りしはずの忘れ水

大和郡山城孝子

落椿神代の水に廻りけり

衣更へて雨のほひの映画館

いちご煮てをり蚊柱の太りをり
逃水や言ふこと聞かぬ牛連れて
花の夜の覚めて重たき掛布団
みづうみの辛き弁当遅ざくら
母の手のつめたかりけり遅桜
縁側側に空の鳥籠山桜
雲雀歩きまだ濡れてゐる石磧
井戸蓋にきれいなままの紅椿
母の日の母は流しを洗ひたて
溝川にうろくづ光る子供の日
庭履のたつぷり濡れてゐし朝寝
くらき眼の氷に映る桜鯛
朧夜のゆきどころなき濠の水
永き日の磴のぼる声老いゐたり
田螺螺また転びし音の金盃
囀囀の中中の停車車や地酒酒買ふ
食食みこぼす嘴嘴をしかりぬ花の昼

宝塚山本耀子

八幡坂口夫佐子

八幡大山文子

選のあとに

山尾 玉藻

逃水につつかへてゐる鼓笛隊 蘭定かず子

遠く逃水が眺められる道路を「鼓笛隊」が進むうち、足並みが乱れたのか隊列が足踏み状態になったのであろう。その状況を「逃水につつかへてゐる」と見た感覚描写が非常に的確であり、また愉しい。

菜の花や渡りしはずの忘れ水 深澤 鱧

「忘れ水」とは野原の中を途切れ途切れに流れている水のこと。先ほどその流れを確かに渡った筈なのに、戻ってみるとそれが見当たらない。辺りに咲く「菜の花」の明るさが作者の記憶を消し去ったかのように、まるで白日夢。

衣更へて雨のにほひの映画館 城 孝子

空調設備が整っている筈の映画館に雨の匂いを感じたのは、密閉された暗い空間に観客が持ち込んだ雨傘の所為かも知れない。しかし何よりも、衣更えをすると身が軽やかとなり、どこか五感が敏感になっていたのであろう。

花の夜の覚めて重たき掛布団 大山 文子

桜の咲く時分、夜中に目が覚めてふと身を被う「掛布団」を重たいと思った。いつも使っていて身に添っている筈の布団をそんな風に感じたのは、桜の頃に抱くほんのりとした高揚感の所為であらう。このように「花の夜」を間接的に詠んだ句もなかなか佳いものである。

くらき眼の水に映る桜鯛 坂口夫佐子

美味な上に桜いろの立派な姿の「桜鯛」に暗いイメージは微塵もない。ところが掲句はそのような常識にとらわれることなく、独自の視線で桜鯛を見詰めている「くらき眼」とは決して眼が濁っていたわけではない。桜鯛の際立った華麗さ故に、氷塊の中に横たわるその眼に悲しみのような翳りを見て取ったのである。この感応はかなり繊細であり、存在するものの奥にある真実を捉えたころの写生と言えるだろう。

永き日の磴のぼる声老いぬたり 山本 耀子

磴をのぼりながら思わず「よいしょッ」とか「よつこらしよッ」の声が出たのであろう。しかしその自分の声が思いがけず年寄りみでいて、作者のころにふと翳りが生じたのだ。齢を重ねていくうちに誰もがいやでも感じる瞬間を気負わず捉えており、共感を呼ぶ。

(以下略)

同人 I

恒星圈

松山直美

堀志皋

村上留美子

記念樹と辛夷苗木を植糸にけり
風鐸の閑かに下がる達治の忌
願はくは花満開の旅立ちに
鐸の付く名前となりぬ紫木蓮
葉桜の静かな下となりけり

ゴム長の女のさばく桜烏賊
柳鮠己が透けぬる影をひき
纜を結はふ手際や風光る
春の月ダンス帰りの二人の上
花の冷清盛舞ひし舞台とや

松井倫子

山田美恵子

日当れる水面の桜まつたひら
満開の花へちかづくまはり道
一瞬の浮子のかたむき鳥の恋
乙女らに穀雨の鳥の声あまた
曇天にゆりの木の芽のとけいりぬ

墓穴を出でまつかうの鳳凰堂
持ち帰る弁当の冷え瀧月
咲き初めの折れし桜や横抱きに
白煙の威し鉄砲水温む
養生の鯉池たひら花曇



獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

書きさしの手紙の横の桜餅
駅長の拾つて来た雀の巢
立ち寄りしモデルルームの春灯
卒業や空き缶を打つ雨の音

川端俊雄

出航に花ひとしきり散りにけり
花のもと迷彩服の列正し
前に花背に新緑の九体佛
桜葉ふむ帷子に子の名前

井上淳子

春嵐道いつぱいに鹿の糞
空壕の影が手をふる夕桜
寝仏に日の当りくる芽吹き山
ぼつかりと空きし一日山笑ふ

根本ひろ子

縁側へ母の手を引く紅枝垂れ
久米の子に仏に降れる春落葉
杭打ちの餅となりし牡丹寺
首塚の蝮に行者ふり向かず

田中文治

問診の言葉すくなし桃の花
枝剪りの手許打ちけり春霞
花曇り肩にひび入る石佛
花の冷母がひたすら眼鏡拭き

西村節子

追ひついて夫に見せたる土筆かな
黄檗の食堂に待つ花の冷
摘草や肘まで袖をたくしあげ
畑打ちつ羽虫払ひつ翁なる

藤本千鶴子

ペンキ匂ふホットドッグ屋さくら咲く
花の日の書棚に並ぶアトム本
青ぬたの話などして同期会
花冷や歌劇へ急ぐ靴の音